

ジャマイカ・マルーンの遺産とアイデンティティ

西出 敬一

はじめに

逃亡奴隷の共同体としてのマルーンは、17世紀以来、イギリス植民地ジャマイカにおける奴隷制プランテーション社会の周辺で、その展開の脅威となってきた。ジャマイカ砂糖プランテーションの発展とともにその勢力を増し、ピーク時の18世紀末には、約1000人のマルーンが、島の西部にある石灰岩の溪谷が入り組んだ複雑な地形の山地（コックピット地帯—Cockpit Country）と、東部にある2000メートル級の険しい山系（ブルーマウンテン）に分かれて、8ヶ所ほどの集落をかまえていた。彼らは植民地軍の度重なる討伐遠征と戦ってマルーン共同体を防衛し、決して屈服することはなかった。

現在のジャマイカにもマルーン共同体が存在して、独特な文化を継承している。しかし、現在もジャマイカ国内におけるマルーン的位置づけは、なお未解決のままである。その大きな原因はジャマイカ・マルーンの歴史にある。それは、マルーンが植民地軍との激しい戦い（マルーン戦争）のすえに、1739年に当局と締結した和平協定（マルーン協定）にまでさかのぼる。また、マルーン協定後のマルーン（協定マルーン）の、その後の行動の評価をめぐるジャマイカ国民（元奴隷の子孫）との対立にある。

ジャマイカのマルーン史についてはすでに別稿（西出、1990,1994）で扱っているので、本稿では、協定マルーンの歴史的意味について、新しい研究動向をふまえて再検討してみたい。

1 マルーン史研究の視点

本格的なマルーン史の研究は、奴隷制史の研究よりややおくれで1970年代以降となるが、そこでは、マルーンを奴隷反乱との関連でどうとらえるかという視点が、大きな比重を占めていた。18世紀のマルーン論は、マルーンを反逆ニグロ（rebellious Negroes）として扱い、奴隷反乱と同じ視点で、おしなべてプランター的で敵対的な視点のものであった（Long, 1774; Edwards, 1793）。これに対して、同時代のマルーン論としては唯一ともいえる、マルーンへの積極的評価を与えたのがリチャード・ダラス（Richard Dallas）であった。彼は歴史家ではなく、白人的先入観をもち、多分にロマンティックな好奇心からマルーンを見ているものの、英雄的に戦った集団としての積極的な評価を与えている。しかも彼は、同時代の多くの資料に目を通してだけでなく、マルーン戦争に従軍した兵士たちからの直接の聞き取りも行っている。彼によると、マルーンは、ジャマイカ政府の存在すら脅かすほどの勇敢な戦いを挑んだ、奴隷と

は比較にならないほど「精かんで卓越した者たち」(Dallas, 1803, I, p.87, II, p.2.) だった。彼のこのようなロマンティックなマルーン論は、その後のマルーン研究に少なからず影響を与えることになるのである。

このようなダラスの視点を継承しているのが、ケアリー・ロビンソン (Carey Robinson) である。彼は逃亡奴隷集団としてのマルーンの活動を「マルーン運動」(maroon movement) ととらえている。その卓越した戦闘能力、勇気、決意、自尊心によって、奴隷主権力に立ち向かい、プランテーション社会の周辺に「解放区」(sanctuary) を形成した点で、奴隷制という抑圧に対する「レジスタンスの象徴」であった、と高く評価する (Robinson, 1969, p.133.)。このようなマルーン評価の流れは、リチャード・プライス (Richard Price) などにも受け継がれていく (Price, 1973)。

一方、このようなロマンティックなマルーン美化論とは別に、奴隷反乱の研究との関連で、マルーン史の本格的な歴史学的研究の先駆けとなったのは、オーランド・パターソン (Orlando Patterson) である。彼は、マルーンを奴隷反乱の延長上で位置づけ、マルーンの本質は「奴隷の反乱の一局面 (one aspect of the revolt of the slaves)」(Patterson, 1970, p.317.) であるとして、マルーン研究を奴隷制史研究の不可分な一部と位置づけたのである。

やがて、1970年代以降になると、独立 (1962年) 後のジャマイカ国民のナショナリズムの高まりを背景にして、さらに、マルーンを奴隷制史の研究上で位置づける本格的な研究の流れをうけて、より客観的で、より詳細なジャマイカ・マルーン史研究が展開されていくことになる。それを代表するのがメイヴィス・キャンベル (Mavis Campbell) である。彼は、パターソンのような奴隷反乱の一部としてのマルーンの副次的な位置づけを越えようとした。彼は、マルーンは確かに奴隷の自由をめざすレジスタンスの一形態であり、その戦いも勇敢であったと認めるが、白人支配を打倒しようとしたハイチの奴隷反乱などちがっていて、奴隷制を打倒するなどの何らかの社会変革をめざしたものではなかった、とやや冷静にマルーンを見ようとしている。しかし、彼はマルーンの別の面に注目する。

マルーンはプランテーションの外部に形成された元奴隷の自治社会であったこと、ゲリラ戦法などの奴隷反乱にはみられない抵抗手段をとったこと、アフリカ文化の伝統を色濃く継承したこと、などである (Campbell, 1990, pp.3-13.)。

キャンベルのようなエスニシティの視点は、多くの新しいマルーン研究者に受け入れられた。その意味で、1991年にジャマイカの西インド大学キャンパスで開催された「マルーンの伝統に関するシンポジウム」は、マルーン研究にとって画期的な意味をもった。同シンポジウムで報告したコフィー・アゴーサ (Kofi Agorsah) は、レジスタンスとしてのマルーンだけでなく、西アフリカ文化の継承者たちとしてのマルーンの意義を強調した (Agorsah, 1994, p.xii.)。リチャード・プライスも自著 (1973年) の1996年版への序文で、マルーンはプランテーション奴隷たちの営んでいた「奴隷の文化」(slave culture) をベースにして、プランテーションの束縛下では表現できなかったアフリカの伝統を山地環境に適応させて、独特の「マルーン文化」(maroon culture) を生み出したことを強調している (Price, 1973・1996, pp.4-28.)。近年は、マルーンをアフリカの伝統の継承という面から研究しようとする、バーバラ・コピトフ (Barbara Kopytoff) らに代表されるアフリカ性 (アフリカネス) の視点からの研究が増加している。

2 マルーン文化とアフリカニズム

マルーンは、その語源が山野へ逃げ込んだ家畜をさすスペイン語の *cimarrón* に由来する通り、プランテーションから山地へ逃亡した奴隷がもともとなって形成された集団である。その意味では明らかに、奴隷制に対する奴隷のレジスタンスの産物である。それだけでなく、マルーン社会の存在自体がプランテーション奴隷制に対する挑戦でもあった (Schuler, 1970, p.377.)。プランテーションがマルーンに略奪されるという直接的脅威だけでなく、自由な社会を形成できるという、プランテーション奴隷にとっての手本となったという点でも、ジャマイカのプランテーション奴隷制の存立基盤を脅かした。

当時のジャマイカ白人にとって、その踏破が困難な山地に立てこもって、得意のゲリラ戦法を駆使して抵抗し、奴隷主権力に屈服しなかった点でも、なお一層、脅威であった。マルーンはこのように、奴隷制に対するアンチテーゼという歴史の意味をもっていたのである。

しかしマルーンを特色づけるのは、そうした面だけでなく、マルーン共同体のもつ濃厚なアフリカネスである。当然、アフリカネスやアフリカ帰属意識はプランテーション奴隷とも共通していた。ジャマイカ人は現在でもラスタ思想に代表されるような強いアフリカ帰属意識を受け継いでいるが、今日のマルーンにも、さらに強くそれが脈打っている。1970年に、マルーン部落の一つムーア・タウン (Moore Town) で、古老が口ずさんでいた歌が採録されているが、それには次のような歌詞がある (Dalby, 1971, pp.49-50.)。

o mi gi-ni bad
o mi gi-ni bad
wi wan go hom
wi wan go hom

(gi-ni bad とは、西アフリカ原産の飛べない家禽をさしている)

プランテーションから山林へ逃げ込んだ奴隷たちにとって、祖国アフリカに帰れるという現実の可能性がない以上、ジャマイカの山奥での共同体は「祖国アフリカに代わるもの」 (Campbell, 1977, p.392.) だった。

ジャマイカでは、多くの奴隷反乱を指導した部族は西アフリカのアカン語系コロマンティン族だったとされ、したがってマルーンを中心エスニックも同部族だったとみられている。アコンボン (Accompong)、クジョー (Cudjoe)、クアコ (Quaco)、クフイー (Cuffee)、ナニー (Nanny) などの有名なマルーン指導者の名前から、グンベイ (gombay—小太鼓)、アベング (abeng—角笛) といったマルーンの生活に不可欠な楽器、また、マルーンの信仰の中心となった呪術をさすオビア (obeah) というのも、彼らの言葉である。近年までマルーン部落の長老たちが覚えていた「アシャンティ・ババ」 (ashanti baba—おはよう) とか「ディント・カマディ」 (dinto kamadi—こんにちは) といった日常会話もそうである。

しかし、コロマンティンというのは、西アフリカの黄金海岸にあった奴隷積み出し港の名称に由来しており、同港から積み出された奴隷がコロマンティンと総称されていたので、西アフリカの特定の部族を指すものではない (Zips, 1996, pp.280-281.)。したがって、ジャマイカのマルーンのエスニシティは、アカン語系の部族を主体としつつ、その他の部族も混入して形成されたとみるのが今のところ妥当であろう。

マルーン文化とは、奴隷が導入したアフリカ原文化がプランテーションの生活のなかで、さらに、山地でのマルーン生活のなかで、いわば修正加筆されてマルーン特有のクレオール文化となったものと解釈できる (Kopytoff, ①1976, pp.36-46.)。

プランテーション奴隷制のジャマイカには3種類の黒人社会があった。プランテーション内の奴隷社会、町の自由黒人社会、そして山地のマルーン社会である。これらは、ジャマイカにおけるアフリカ人のディアスポラの諸形態であるが (Gottlieb, 2000, pp.86-87.)、その中でも、アフリカ文化を最も色濃く保持し続けていたのがマルーンであった (Kopytoff, 1987, p.464.)。

そもそもマルーンの領地は共有制であった。マルーン協定で付与された領地も共有で、家族に保有が認められた土地は、家族へ相続できるのみで、売買は禁じられていた。私有地制に基づいて成立しているプランテーション社会のジャマイカでは、きわめて異例の形態であった。また、マルーンの世界生活を支配したのは、プランテーション奴隷の場合と同じく、超自然的なもの、霊的なものへの畏敬を基礎とするアフリカの信仰である。祖先の供養の儀式で、鶏の血とラム酒を混ぜたものと、鶏の内臓と米をバナナの葉でくるんで焼いたものを供えるマルーンの風習を、今日でも継承している部落もあるという (Schafer, 1973, pp.211-261.)。なかでも呪術師オビアは絶大な影響力をもっていたとされ、東部マルーンのナニーという女性オビア師が白人との戦争の指揮をとった。白人は、彼女のいるマルーン部落をナニー・タウン (Nanny Town) とよんで恐れていた。マルーン戦争における彼女の活躍は、敵の銃弾を背中ではねかえして白人兵を殺したとか、火を使わず釜で湯を沸かし白人兵を煮たとか (Tuelon, 1973, p.21.)、誇張されて英雄伝説となり、今日まで伝えられている。

マルーン部落の生活は、山間の空き地に開墾した畑での作物の栽培を基本にして、これに野草の採取と森での野豚などの狩猟、川魚の捕獲などで支えられていた。彼らの薬草の知識は豊富だった。手製の鉞で川魚を捕獲する、1960年代頃のものと思われる貴重な様子がビデオに残されている (African Caribbean Institute of Jamaica 所蔵)。これらの食料調達活動は、アフリカでの経験と知識がフルに発揮できる場面であった。畑での作物はプランテーションの奴隷菜園とほぼ同じで、ヤム芋、とうもろこし、バナナや野菜を栽培し、小屋の近くで鶏、豚、山羊などを飼育していた。装身具、塩漬け肉、ニンジンなど不足するものは、地方の日曜市で調達することもあった。農具や銃、弾薬はプランテーションを襲撃して奪った。マルーンの祭礼や戦いの踊りで用いた小太鼓のグンベイも、伝達手段の角笛アベングも、アフリカ伝来のものであった。

白人がマルーン部落に立ち入ることなどほとんどなかった1940年代に、シカゴ大学大学院で文化人類学を専攻し、民族ダンスを研究していた女子学生のカサリン・ダンハム (Katharine Dunham) が、アフリカン・スタディーズでアメリカを代表する著名な文化人類学者メルヴィル・ハースコヴィッツ教授 (Melville Herskovits) の紹介で、ジャマイカ西部のアコンボン部落で1ヶ月間のフィールドワークをしたことがある。彼女はその貴重な体験記を1946年に出版しているが、彼女はまさにそのマルーン部落で、アフリカ文化を発見したのである。それによると、村人の集会はアベングで招集されており、また、ある老人がグンベイを打ち鳴らして様々な音色をだすと、集まってきた村人たちがこの老人のグンベイにあわせて楽しそうに踊るのを目の当たりにした。彼女は、これは「まさにアフリカの踊りだ」と直感したとい

う (Dunham, 1946, p.132.)。

さらに、広い意味でマルーン文化として評価すべきなのは、彼らが生き残るための白人との戦いのなかであみだしたゲリラ戦法である。この戦法を身に付けたからこそ、絶対的に少数のマルーンが植民地軍を撃退し、また、プランテーションを巧みに略奪することができたし、ジャマイカのプランテーション・システムを脅かしえたのである。1749年ころのマルーン人口の、少なめの推定によると、東部 300 人、西部 360 人、あわせて 660 人とされている。そのうち女性と子供が 390 人で、全体の約 6 割も占めている (Long, II, 1774, p.350.)。また、1770 年ころのマルーン人口推定によると、西部 520 人、東部 410 人、あわせて 930 人であるが (Robinson, 1969, p.125.)、当時のジャマイカ全人口のなかでは圧倒的に少数であった。この頃のジャマイカ人口は、白人が 17000 人に対して、奴隷が 19 万人もいたのである。

同時代のロングは、マルーンのゲリラ戦法について次のように述べている。

彼らは島のあらゆる道に通じており、追跡から身を隠すことも、敵を待ち伏せすることも、略奪地を必要に応じて転々と変えることもできる。このとらえどころのない敵と対峙せざるをえないことが、イギリス側の大きな不利である。だから、我々が正規の作戦をいかに駆使しても鎮圧できないのである」 (Long, II, 1774, p.342.)。

マルーンは、白人が容易に入り込めない東西の険しい山奥に部落をかまえているだけではなく、植民地軍の討伐隊が山に分け入ると、白兵戦を避け、部落を発見されそうになると、すばやく撤収した。各所に配置した見張りからの連絡で、敵の位置、進行方向、人数を手取るように把握していた。ここでの情報伝達手段として大きな役割を果たしたのが、アベングである。敵が狭い通路にさしかかるなど有利な状況になると、攻撃をしかけた。攻撃の際には体に木の葉で迷彩をほどこし、森の中に身をかくして、少人数で奇襲をかけた。マルーン戦士の指揮系統はマルーン社会の指導組織と重複していて、白人民兵のそれから学んだ形態をとっていた。部落の長を兼ねる最高指揮官は大佐 (Colonel) でその下に少佐 (Major)、さらにその下に大尉 (Captain) がいた。部落の指導者と軍事指揮者が同一であるというのは、常に敵の攻撃に備えざるを得ないマルーンの宿命だったためであろう。ちなみに、現在のマルーン行政組織もこの役職名称が受け継がれている。マルーンは自由以外に、白人に奪われるめぼしい財産を何も持っていなかった。先に引用した同時代の目撃者であるロングは、「彼らは生命と自由以外に失うものを何も持っていない」と述べている (Long, II, 1774, p.342.)。このこともまた、マルーン戦士の士気の強さの理由であった。

一方、マルーン討伐に動員された植民地軍は、イギリス正規軍が加わらない場合、白人民兵、徴用された自由黒人兵、プランターから供出された奴隷兵 (black shots) を主力とし、これに同じくプランターから供出された荷役奴隷 (baggage Negroes) が同行した。ほとんどが渋々動員されており、雨の多い険しい山中の道なき道の行軍そのものに疲弊し、マルーンの奇襲をうけると四散してしまうことが多かった。まさに白人からみればマルーンの住む山中は「ロビンフットの森」(Campbell 1990, p.79.) だった。

マルーンのゲリラ戦法には、アフリカでの部族戦争や、アフリカの森や草原を駆け巡っていた原体験が生かされたとも想像できるが、奴隷がアフリカから導入した文化が具体的に大きな役割を果たした。その代表的な例が、先述したような角笛アベングである。これは牛の角の先端部分に穴を開けて音をだすもの

だが、その音は15キロ先まで届いたといわれ、敵の動向（位置や人数）を伝える必需品であった。

また、士気を鼓舞する戦闘の踊りには、丸太を削って羊の皮を張った小太鼓グンベいの響きが不可欠であった。さらに、アフリカ伝来の呪術を司るオピアの占いが作戦に使われたし、東部マルーンではオピア呪術師自身が戦闘の指揮をとった。このように、マルーン史を特色づけるゲリラ戦法も、アフリカニズムと不可分だったといえるのである。

植民地軍のマルーン討伐遠征のほとんどが失敗するのだが、1739年のマルーン協定にいたるマルーン戦争の一つにおいて植民地軍部隊の指揮をとった、ある白人大尉の日記がある。1732年に、「島の安全が脅かされている」という総督のアピールをうけて、東部マルーン掃討作戦が企画された。

同年の1月から3月にかけてブルーマウンテン山系での作戦が展開される。ターゲットは東部マルーンの内ニ一部落で、南北両方向から軍を進め、内ニ一部落で合流することになっていた。北のポートアントニオからトマス・ピーター大尉が率いる278人（白人民兵86人、黒人兵131人、荷役奴隷61人）の部隊、南のキングストン近郊リグアナエアからクリストファー・アレン大尉が率いる126人（白人民兵5人、黒人兵93人、荷役奴隷28人）の部隊、合わせて総勢404人の遠征軍であった。当時のジャマイカとしては大規模なこの作戦も、結局、内ニ一部落にたどり着いたときには、すでに部落はもぬけの殻となっていて、失敗に終わる。日記を残しているのは、この作戦で南方部隊を率いたアレン大尉である。

彼の日記には、マルーン討伐作戦の困難さがよく示されている。彼の部隊は2月2日に出発してブルーマウンテン山地に分け入るが、劣悪な山林での行軍で、ほどなく隊員に病人がでる。3月1日には、民兵3人、黒人兵1人、荷役奴隷1人が動けなくなって、脱落した。3月3日には、険しい岩場で負傷した数人が脱落する。厳しい寒さと降りしきる雨のなかをさらに進むが、3月8日には食糧が底をつき、3月11日の日記には、「厳しい寒さと飢えに追い打ちをかけるような大雨は、我々を全滅させるに足る打撃だ」と記されている。3月14日には、森陰からのマルーンの射撃におびえた味方の誤射で、3人の黒人兵が死亡する。3月16日によくたどり着いたマルーン部落には、すでに人影はなかった。逆にマルーンの待ち伏せ攻撃を受け、白人兵4人、黒人兵1人が死亡し、黒人兵6人が負傷した。その後もマルーンのゲリラ攻撃は続き、3月19日によく北方部隊が到着したため、全滅を免れたのである（Shafer, 1973, pp.310-314.）。

このようにマルーンは、ジャマイカの複雑で険しい山地条件を巧みに利用し、白人の軍事組織を参考にし、かつ白人から奪った武器で、しかもアフリカの文化と経験を生かして、圧倒的に少数な戦士で植民地軍を撃退し、制圧されることがなかった。むしろ逆に、ジャマイカのプランテーション奴隷制を絶えず脅かしたのである。ジャマイカのマルーン戦争は、南米のオランダ領スリナムにおけるマルーン戦争（Groot, 1975, pp.30-48.）に次ぐ規模でゲリラ戦法に成功した事例であり、キャンベルも言うように、ベトナム戦争にまでつながる近代ゲリラ戦法の先駆けとなった（Campbell, 1990, p.116.）。だから、現在のジャマイカに残存するマルーン部落の人々も、この戦いの歴史と伝統に強い誇りを持ち続けているのである。

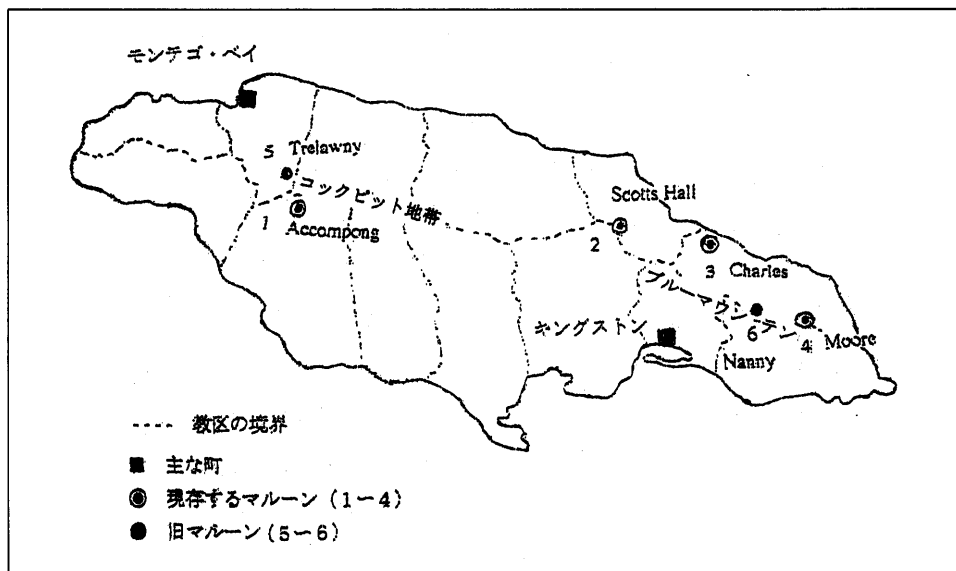
3 マルーンの遺産とアイデンティティ

ジャマイカに現存するマルーン部落は、西部のアコンボン・タウン (Accompong Town)、東部のスコッツ・ホール (Scotts Hall)、チャールズ・タウン (Charles Town)、ムーア・タウン (Moore Town) の4ヶ所で、人口は推定 3000 人程度とみられる。

どの部落も、程度の差はあっても、マルーンの歴史と文化的伝統に誇りを持ち続けているが、マルーン協定 (1739 年、1740 年) から奴隷制の廃止 (1834 年) をへてジャマイカの独立 (1962 年) にいたる状況の変化は、ジャマイカにおけるマルーン問題を複雑にしている。特に、ジャマイカ国民 (プランテーション奴隷の子孫) のもつマルーンへのわだかまりが、その大きな原因といえる。ジャマイカ国民がマルーンに不信を抱いてきた歴史的要因は、マルーン協定とその後のマルーンの行動にある。激しいマルーン戦争の末に植民地政府と結んだマルーン協定で、マルーンは、マルーンの自由の保障と引き換えに、逃亡奴隷の送還 (報酬を受ける)、奴隷反乱鎮圧への協力 (報酬を受ける) を約束していた (西出, 1994, pp.155-161.)。このことがジャマイカ国民のマルーン評価に大きな影響を及ぼすことになるのである。

1834 年にイギリス議会が植民地の奴隷制を廃止すると、ジャマイカ当局にとって、逃亡奴隷の捕獲者、奴隷反乱鎮圧の協力者としてのマルーンの主要な存在価値が失われた。それともなると、マルーンに対して、ジャマイカ社会への統合、同化の圧力が強くなる。ジャマイカ政府は、マルーン協定によってマルーン部落に白人駐在官 (Superintendent) を派遣することになっていた。当初の目的は、マルーンと総督との「友好的な」通信、連絡のためであったが、マルーン協定を「マルーンの降伏」ととらえる当局のよって、しだいに、駐在官が、マルーン内政への干渉、さらにはマルーン管理の手段とされていった (Kopytoff, ©1976, p.101.)。

ジャマイカ・マルーンの所在地



マルーン同化への明確な圧力は、奴隷制廃止の直後に現れた。1842年にジャマイカ議会が制定したマルーン土地割当法がそれである。この法律は、従来のマルーン関連立法を一括して無効とし、新たにマルーンの地位に根本的改革を強制する内容を含んでいた。それは、マルーンの共有領地をいったんイギリス国王に返納させ、あらためて国王から、マルーン個人に一定面積の土地を、私有地として割り当てるというものであった。マルーン土地割当法の主な内容は次の通りである (Price, 1973, pp.384-387.)。

第1条 状況の変化によって、議会在定めたマルーンに関する法律をすべて無効とする。

第2条 マルーンは、一般島民と完全に平等なイギリス臣民としての権利を与えられる。

第3条 マルーンに付与されている土地は、すべて国王に返納することとする。

第5条 成人のマルーンは、各部落の所属する教区の土地分配委員会に、1人2エーカーの分配を申請できる。申請者の子と孫にも1人1エーカーが付与される。

これは明らかにマルーン協定の違反であり、マルーンがこの協定で確保している権利 (treaty rights) の一方的な剥奪を意味していた。さすがに多くのマルーン部落がこれに反対し、いまだにほとんど実行されていないのが実情である (Zips, 1998, p.109.)。マルーン協定が双方の同意で破棄されていないので、マルーンの地位は宙に浮いたような曖昧な状態で続いており、課税をはじめ双方の懸案が未解決で、不安定な関係が解消されていない (Bilby, 2002, p.29.)。

一方で、ジャマイカ国民のマルーンへの関心は薄れるばかりであった。山奥でひっそりと暮らしている神秘的な部落として、タブー視され、近づこうとする国民もほとんどいなかった。これに関して、次のようなエピソードがある。1966年にジャマイカで英連邦競技大会が開かれたときのことであるが、取材に来ていたガーナ人記者が、西アフリカにあるのと同じ名前のアコンボンという地名がジャマイカにあるのに気づき、ジャマイカ人スタッフに尋ねた。このスタッフは、この時初めてジャマイカにこんな場所があること知ったという (Birham, 1985, pp.23-25.)

今日でもマルーンは、観光などでの一定の交流はあるものの、なお特殊な部落として存在し、国民に十分に開かれているとはいえない。キリスト教の普及もあって、マルーン部落の生活や服装は、一般国民と外見上大差ないところまできているが、スコッツ・ホールのように単なる寒村のような部落から、アコンボンのように観光客を多く受け入れている部落まで様々である。同時にマルーン部落には、まだ多くの過去のマルーン時代の文化や伝統が継承されている。領地の共有制という今日のジャマイカでは異例の土地制度をはじめとして、Colonelを村の最高リーダーとして、その下にMajorがいて、さらにCaptainがいるという、マルーンが植民地軍と戦っていた時代のままの役職が残されている。

「マルーンの遺産に関するシンポジウム」(1991年)での、ムーア・タウンのColonelハリス氏の報告によると、マルーンのアフリカの伝統は、祭礼における音楽や踊りだけでなく、日常生活においても、村に病人がでると、祖先の霊に祈る踊りをしたり、マルーン伝統の薬草が用いられているなど、様々な形で継承されているという (Agorsah, 1994, pp.45-61.)。

ジャマイカのマルーン問題がふたたび一般国民の関心を集めるようになったのは、独立後のジャマイカ・ナショナリズムの高揚のもとであった。このなかで、ジャマイカ国民が誇る闘いの伝統のルーツたる奴隷反乱だけでなく、マルーンの伝統もジャマイカ国民史に統合していくべきだという発想が生まれてき

たのである。この発想は、はじめは歴史研究者などから提唱され、やがて政治的課題へと発展していくことになる。例えば、アラン・テュエロン (Allan Tuelon) は、植民地軍と勇敢に戦った東部マルーンの伝説的指導者ナニーを、ジャマイカ国民の英雄の一人として扱うべきであると提唱している (Tuelon, 1973, p.25.)。

こうしたマルーン再評価の動きをうけて、ジャマイカ政府は 1976 年に、イギリス奴隷制廃止法の成立に大きな影響を与えた 1831 年の奴隷反乱 (クリスマス反乱) の指導者サムエル・シャープ (Samuel Sharpe) らと並んで、マルーンの伝説的指導者ナニーを国民英雄に認定したのである。近年発見された旧ナニー部落跡が史跡とされ、1994 年には、彼女が 500 ジャマイカドル紙幣 (“Nanny Note”) の肖像に選ばれている。

そもそも、一般ジャマイカ人とマルーン双方の感情のわだかまりが根強く、ジャマイカ人がマルーンをよそ者扱いし、関係が疎遠になったことの原因を知るには、先述したように、植民地におけるイギリス流分割支配の産物たるマルーン協定にまでさかのぼらなければならない。

このわだかまりは、ナニーがジャマイカ国民の英雄に選ばれた後の今日でも、十分解消されているとはいえない。2001 年のジャマイカの有力紙に掲載されたロイド・ジェフリー氏 (Lloyd Jeffrey) の記事 “Support the Maroons” に対して、同紙のウェブサイトに次のような書き込みがあった。

自分たちの自由と引き換えに我々をイギリスに売ったのは、やつらだということを忘れてはならない。逃亡した我々の祖先を捕まえて奴隷主に引き渡したのも、やつらだったことを忘れるな。(Jamaica Observer, May 5, 2001)

このように、マルーン協定とそれに基づくその後のマルーンの実行が、ジャマイカ国民とマルーンの間でわだかまりとなって尾を引いていることがわかる。マルーン協定は、マルーン戦士と植民地軍のマルーン戦争の和平協定にちがいないが、そもそも最初から双方に協定の評価に食い違いがあった。マルーン側は、この協定を奴隷主階級と戦ってマルーン共同体の自由を認めさせた戦果だと解釈した。現在でも、チャールズ・タウンでは、イギリスと戦って協定を勝ち取った英雄的指導者クアオ大尉を記念する祝祭としての Quao Day が毎年 6 月に行われているし、アコンボン部落では、毎年 1 月に、協定を勝ち取ったことを祝う行事が行われ、同マルーンの偉大なリーダーだったクジョー (Cudjoe) の墓前で、戦士に扮した村人が伝統的な戦士の踊りを行う。

これに対して植民地側は、協定は反徒ニグロの制圧の取り決めであり、しかもマルーンから降伏を申し出たものだとして解釈してきた。だから、協定を「鎮圧条項」(Articles of Pacification) と呼んだし、総督も協定締結直後の手紙 (1739 年 3 月 5 日) で、次のように述べている。

反逆ニグロたちは、武力で事態を好転させるのがほとんど不可能とみなして、和平を願い出てきました。そこで私は、参議会の助言にしたがって、その申し出を受け入れてやることを許可いたしました。(Campbell, 1990, p.111.)

さらに当時のプランターでもあったロングは、マルーンの指導者クジョーから直接聞いた話として、クジョーが、総督からの和平の申し入れがなかったら「餓死するか降伏するかしかなかった」と述懐していたというエピソードまで紹介している (Long, II, 1774, p.344.)。

協定をジャマイカ国民とマルーンの間で反目的原因としてきたのは、主にマルーンが協定によって義務とし

て負った2つの項目である。一つは、プランテーションから山地に逃亡してきた奴隷を捕まえて、プランター側に引き渡すという項目である。これは、奴隷制から脱却し自由になろうとするプランテーション奴隷にその道を遮断するに等しい。もう一つは、奴隷反乱をふくむ島内の反乱、騒擾の鎮圧に協力するという項目である。これは、プランテーション奴隷制に武力で挑戦する奴隷たちの闘いを、葬り去ろうということと同じであった。マルーンは本来、奴隷の逃亡や反乱の結果生まれたものであるから、プランテーションの奴隷にとっては、協定マルーンは、奴隷主階級の手下となって、自分たちを裏切ったと映る。

これが多くのジャマイカ国民の思いであった。現にマルーンは逃亡奴隷を捕まえて引き渡し、奴隷反乱には、総督の要請に応じて植民地軍に兵員を派遣した。ロングは、協定へのマルーンの忠実さについて次のように述べている。

(マルーンは)我々との約束をよく守り、奴隷反乱の鎮圧にも協力している。彼らが山中にいらっしゃるおかげで、奴隷反乱が減少しつつある。(Long, II, 1774, pp.445-447.)

マルーンは、これらの活動で受け取る報酬を貴重な現金収入としていた。例えば、奴隷狩りに動員されたときの日当が7ペンス、捕まえて引き渡せば1人頭3ポンドとされた。1760年の大規模な奴隷反乱(タッキーの乱)の鎮圧に兵員を出した報酬として、アコンボン部落とトレローニー部落(Trelawny Town)に、それぞれ450ポンドずつが支払われた。この奴隷反乱で、首謀者のタッキーを山中で追跡し殺害したのは、マルーン戦士だった。しかも、1795年に同じマルーンのトレローニー部落が総督に反旗をひるがえした際にも、アコンボン部落がその制圧に協力して、500ポンドの報酬を与えられている(Kopytoff, 1973, pp.169-170.)。

さらに、マルーン自身が奴隷を所有していたとみられている。例えば、ムーア・タウンの奴隷人数は1793年の20人から1829年の62人(部落人口579人の約11%)に増加している。4部落の合計所有奴隷も、1798年の40人から、1825年の112人、1833年の121人(4部落人口1423人の約8.5%)と増え、しかも、1834年の奴隷制廃止法にもとづいて、賠償金まで受け取っているのである(Campbell, 1990, p.202.)。

このように、協定後のマルーンは、奴隷制と戦ったり、奴隷が自由になるのを手助けしたりしなかっただけでなく、むしろ奴隷制のサポートにまわったという面がある。しかし、現在の視点だけから、マルーン史に対して、「自由の戦士」(freedom fighters)たるべきだったという、過度の期待や先入観で理想像を求めるのは、やや酷であろう。マルーンも、自由を守るために必死で戦っていたのである。

さらに、植民地におけるイギリスの分割支配という政策が功を奏したという側面を考慮すべきである(Agorsah, 1994, p.xiii)。マルーンからみれば、プランテーション奴隷の一部も、奴隷主の命令とはいえ、黒人兵や荷役奴隷としてマルーン討伐軍に加わっていたし、ほとんど全ての奴隷は、マルーン戦争に呼応して立ち上がることはなかったのである(Schafer, 1973, p.133.)。

ジャマイカのマルーン問題は、南北アメリカにおける先住民族(インディオ)問題や人種問題とは異なる。ジャマイカ国民もマルーンも、アフリカンとしてのルーツは同じであり、従って人種も文化も共通している。双方の差異は、歴史的伝統の差異に由来する分離の問題である。したがって、ジャマイカ国民が、マルーンが奴隷身分を拒否して自力で自由を獲得し、自立社会を営み、植民地の度重なる軍事作戦にも屈服しなかったことを、ジャマイカのレジスタンスの一部と認めるのか、ジャマイカ文化のルーツでも

あるアフリカ文化の伝統を長く保持してきたマルーンの特性を認め、文化的共感を抱けるのか、このことが、今後のジャマイカ国民とマルーンの和解の鍵となるかもしれない。そのためには、文化多元主義の観点からも、ジャマイカ政府のマルーン文化保護政策の確立が早急に望まれている。

一方でマルーンの人々も、マルーンの歴史と伝統には強い誇りをもっているが、様々な今日の問題も抱えている。マルーンを出た若者のなかには、マルーン文化の継承のために、部落に U ターンする者も増えている。その一人が、反乱を起こして消滅したトレローニー部落の残存者の子孫であるグロリア・シムズ (Gloria Simms) さんである。このマルーン部落は 1795 年にジャマイカ政府に反抗して敗れ、村民のほとんどが、カナダのノヴァスコシアへ追放され、やがて西アフリカのシエラ・レオネに植民させられたのであった (西出、1990, pp.121-124.)。彼女は、若い頃に村を飛び出して、キングストンでラストファリ運動に加わっていたが、マルーン文化の重要性を再認識し、村に帰って、トレローニー・マルーンの復活をめざして、その文化活動のリーダーとなっている。彼女は次のように語っている。

今の我々は、外部の文化の影響を受けて、マルーンのアイデンティティを失いつつある。本来の伝統文化を復活しなければならない。(Jamaica Gleaner, March 25, 2008)

マルーンのなかには、チャールズ・タウンのように、部落にマルーン・ミュージアムを設けて古民具や民芸品を展示したり、アコンボンのように、マルーンの伝統や文化を外部に積極的にアピールし、マルーンの行事を観光化しているケースもある。この部落に、アメリカ企業の資本を導入してカジノを建設しようという計画さえ出されている (Jamaica Gleaner, January 9, 2009.)。しかし、このようなマルーンの観光化には、古老の中からその行き過ぎを危惧する意見もでている。部落の長老 Colonel シドニー・ペディー (Sydney Peddie) さん自身も次のように語っている。

祭礼が商業化し、観光客はマルーンの工芸品を土産物として買ってくれる。しかし、祭礼は、祖先がマルーンの自由のために戦ったことを称え、マルーン文化を守ってゆくものとすべきである。(Jamaica Gleaner, May 3, 2008)

むすび

資本主義的な近代大西洋 (経済) システムの基本構成要素となったのが、ブラジルからカリブ海地域を経て北米南部に連なるプランテーション・アメリカとよばれる地域圏である。プランテーション・アメリカという概念を初めて提唱したチャールズ・ワグリーは、比較文化史的視点から、両米大陸を、白人人口の多いヨーロッパ系アメリカ (Euro-America)、先住民人口の多いインディオ系アメリカ (Indo-America) と並んで、第三の文化領域 (culture sphere) として、商品作物の生産を奴隷制プランテーションで行うプランテーション・アメリカ地域を区分した (Wagley, 1957, pp.3-13.)。ワグリーが区分したこのプランテーション・アメリカの最大の特質は、「世界システムが辺境に作り出した労働制度」(Wallerstein, 1976, p.1211.) としての、プランテーションにおける奴隷制であった。さらに、フィリップ・カーティン (Philip Curtin) は、この地域圏におけるプランテーション奴隷制の持つ特質は、大西洋市場とのつながり、奴隷労働の資本主義的管理、プランターの領主的権力などの諸要素の複合にあるとみなして、それをプランテーシ

ン・コンプレックス (plantation-complex) と呼んだ (Curtin, 1990, pp.11-13, 53,73,204.)。ウオーラーステインからもカーティンからも、この近代世界システムのもつ、「奴隷制と資本主義」というみせかけのパラドクスがよくうかがえる。

プランテーション奴隷制が近代大西洋システムのペリプエリーに位置したとすれば、マルーンの歴史はペリプエリーのペリプエリーともいうべきものであった。奴隷反乱がプランテーション・コンプレックスに対するレジスタンスだったとすれば、マルーンも同じように「ブルジョワ的世界システムへの反抗の一部」(Genovese, 1979, p.2.)と位置づけられる。したがって、奴隷反乱もマルーンの戦いも、ジャマイカにおけるブラック・ディアスポラの、自由をめざす闘争として統括できることになる (Patterson, 1970, p.2; Campbell, 1973, p.54; Manigat, 1977, p.431.)

プランテーション内の奴隷社会もプランテーション外のマルーンも、文化的にはジャマイカにおけるアフロ・アメリカであったが、特にマルーンは、プランテーション奴隷制という白人の管理、束縛から解放された、一種の解放区として、アフリカの伝統文化をより純粋で濃厚に継承してきた。今日のジャマイカにおけるマルーン問題の解決のためにも、このアフリカネスに視点をすえたマルーン史研究の発展が期待される。

参考文献

- 1) Long, Edward (1774), *The History of Jamaica*, London, vol.II.
- 2) Edwards, Bryan (1793), *The History of Civil and Commercial of the British West Indies*, London: vol..II.
- 3) Dallas, Richard (1803), *History of the Maroons*, London: 2 vols
- 4) Dunham, Katharine (1946), *Journal to Accompong*, New York: Henry Holt and Company.
- 5) Hart, Richard (1950), "Cudjoe and the First Maroon War in Jamaica", *Caribbean Historical Review*, 1, pp.46-79.
- 6) Rubin, Vera, ed. (1957), *Caribbean Studies: A Symposium*, Seattle: University of Washington Press.
- 7) Wagley, Charles (1957), "Plantation-America: A Culture Sphere", *ibid.*, pp.3-13.
- 8) Russell, Norman (1960), "The Maroons Today", *Jamaican Historical Society Bulletin*, 2-13, pp.209-210.
- 9) Furness, A.E. (1965), "The Maroon War of 1795", *Jamaican Historical Review*, 5-2, pp.30-49.
- 10) Robinson, Carey (1969), *The Fighting Maroons of Jamaica*, London: William Collins and Sangster.
- 11) —(1969), *The Iron Thorn: The Defeat of the British by the Jamaican Maroons*, Kingston: Collins and Sangster.
- 12) Sheridan, Richard (1969), "The Plantation Revolution and the Industrial Revolution, 1625-1775", *Caribbean Studies*, 9-3, pp. 5-25.
- 13) Cary, Beverley (1970), "The Windward Maroons after the Peace Treaty", *Jamaica Journal*, 4-4, pp.19-22.
- 14) Schuler, Monica (1970), "Ethnic Slave Rebellions in the Caribbean and the Guianas", *Journal of Social History* 3, pp. 374-385.
- 15) Wright, Philip (1970), "War and Peace with the Maroons, 1730-1739", *Caribbean Quarterly*, 16-1, pp.5-27.
- 16) Patterson, Orlando (1970), "Slavery and Slave Revolts: A Socio-Historical Analysis of the First Maroon War, Jamaica, 1655-1740", *Social and Economic Studies*, 19, pp.289-335.

- 17) Dalby, David (1971), "Ashanti Survivals in the Language and Traditions of the Windward Maroons of Jamaica", *African Language Studies*, 12, pp.31-51.
- 18) Doridzo, A.D. (1972), "The Origin of the Second Maroon War, 1795-96: A Planter's Conspiracy?", *Jamaica Journal*, 6-1, pp.21-25.
- 19) Martin, Leann (1972), "Why Maroons?", *Current Anthropology*, 13-1, pp.143-144.
- 20) Campbell, Mavis (1973), "The Maroons of Jamaica: Imperium in Imperio?", *Pan-African Journal*, 6-1, pp. 45-55.
- 21) Price, Richard, ed. (1973), *Maroon Societies: Rebel Slave Communities in the Americas*, Anchor Press; 2nd.ed. 1996, Johns Hopkins University Press
- 22) Kopytoff, Barbara (1973), *The Maroons of Jamaica: An Ethnohistorical Study of Incomplete Politics, 1655-1905*, Ph.D.dissertation, University of Pennsylvania.
- 23) Schafer, Daniel (1973), *The Maroons of Jamaica: African Slave Rebels in the Caribbean*, Ph.D.dissertation, University of Minnesota.
- 24) Tuelon, Allan (1973), "Nanny-Maroon Chieftainess", *Caribbean Quarterly*, 19, pp,20-27.
- 25) White, Elan (1973), "The Maroon Warriors of Jamaica and Their Successful Resistance to Enslavement", *Pan-African Journal*, 6, pp.297-312.
- 26) The Scientific Exploration Society (1974), "Blue Mountains Expedition: Exploratory Excavations at NANNY TOWN", *Jamaica Journal*, 8-2 · 3, pp.46-49.
- 27) Groot, Silvia (1975), "The Boni Maroon War 1765-1793: Surinam and French Guyana", *Boletin de Estudios Latino Americanos*, 18, pp.30-48.
- 28) Kopytoff, Barbara (1976①), "The Development of Jamaican Maroon Ethnicity", *Caribbean Quarterly*, 22, pp.33-50.
- 29) ————(1976②), "Jamaican Maroon Political Organization: the Effects of the Treaties", *Social and Economic Studies*, 25-2, pp.87-105.
- 30) Wallerstein, Immanuel (1976), "American Slavery and the Capitalist World-Economy", *American Journal of Sociology*, 81.
- 31) Campbell, Mavis (1977), "Marronage in Jamaica: Its Origin in the Seventeenth Century", in Vera Rubin and Arthur Tuden, eds. *Comparative Perspectives on Slavery in New World Plantation Societies*, New York: New York Academy of Sciences, pp. 389-419.
- 32) Manigat, Leslie (1977), "The Relationship between Marronage and Slave Revolts and Revolution in St.Domingue-Haiti", *ibid.*, pp. 455-463.
- 33) Groot, Silvia (1977), "Maroons of Surinam: Dependence and Independence", *ibid.* pp. 455-463.
- 34) Kopytoff, Barbara (1978), "The Early political Development of Jamaican Maroon Societies", *William and Mary Quarterly*, 35, pp. 287-307.
- 35) ———— (1979), "Colonial Treaty as Sacred Charter of the Jamaican Maroons", *Ethnohistory*, 26, pp.45-63.
- 36) Genovese, Eugene (1979), *From Rebellion to Revolution: African-American Slave Revolts in the Making of the Modern World*, Baton Rouge: Louisiana State University Press.
- 37) Parris, Scott (1981), "Alliance and Competition: Four Case Studies of Maroon-European Relations", *Nieuwe West-indische*

- Gids*, 55, pp.174-225.
- 38) African Caribbean Institute of Jamaica (1982), "The Maroons of Jamaica", *Newsletter*, 7, pp.3-40.
- 39) Beckles, Hilary (1982), "The 200 Years War: Slave Resistance in the British West Indies: An Overview of the Historiography", *Jamaica Historical Review*, 13, pp.1-10.
- 40) Brathwaite, Edward (1982), "The Slave Rebellion in the Great River Valley of St. James, 1831/32", *Jamaica Historical Review*, 13, pp.11-41.
- 41) Bilby, Kenneth (1984), "The Treacherous Feast: A Jamaican Maroon Historical Myth", *Bijdragen tot de Taal Land en Volkenkunde*, 140, pp.1-31.
- 42) Campbell, Carl (1984), "Missionaries and Maroons: Conflict and Resistance in Accompong, Charles Town and Moor Town, Jamaica, 1837-1838", *Jamaican Historical Review*, 14, pp.42-58.
- 43) Birham, Earika (1985), "The Maroons: African Freedom Fighters in the Hill of Jamaica", *The Reggae and African Beat*, 4-4, pp.23-25.
- 44) 西出 敬一 (1986)、「砂糖と黒人奴隷制—ジャマイカ奴隷制経済の展開—」『札幌学院大学人文学会紀要』39号、pp.1-28.
- 45) Kopytoff, Barbara (1987), "Religious Change Among the Jamaican Maroons: The Ascendance of the Christian God within a Traditional Cosmology", *Journal of Social History*, 20, pp.463-487.
- 46) Robinson, Carey (1987), *Fight for Freedom*, Kingston: LMH Publishing.
- 47) Solow, Barbara (1987), "Capitalism and Slavery in the Exceedingly Long Run", *Journal of Interdisciplinary History*, 17-4, pp.711-737.
- 48) Brathwaite, Edward (1989), "Maroon and Marooned", *Jamaica Journal*, 22-3, pp.51-56.
- 49) 西出 敬一 (1989)、「ジャマイカ・プランテーション奴隷の生活」『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』平凡社、pp.45-70.
- 50) Campbell, Mavis (1990), *The Maroons of Jamaica, 1655-1796: A History of Resistance: Collaboration and betrayal*, Trenton: Africa World Press.
- 51) Curtin, Philip (1990), *The Rise and Fall of the Plantation Complex: Essays in Atlantic History*, New York: Cambridge University Press.
- 52) Ward, J. R. (1990), "Review Article: Jamaica's Maroons", *Slavery and Abolition*, 11-3, pp.399-403.
- 53) 西出 敬一 (1990)、「From Invisible Men to Visible Men—ジャマイカにおけるプランテーション奴隷の労働と生活」『札幌学院大学人文学会紀要』48号、pp.113-141.
- 54) Campbell, Mavis (1993), *Back to Africa: George Ross and Maroons: From Nova Scotia to Sierra Leone*, Trenton: Africa World Press.
- 55) Agorsah, E. kofi, ed. (1994), *Maroon Heritage: Archeological, Ethnographic and Perspectives*, Kingston: University of West Indies.
- 56) Edward, Albert (1994), "Maroon Warfare: the Jamaica Model", *ibid*, pp.149-162.
- 57) Bilby, Kenneth (1994), "Maroon Culture as a Distinct Variant of Jamaican Culture", *ibid*, pp.72-85.

- 58) 西出 敬一 (1994)、「マルーン協定と奴隷制—ジャマイカにおけるマルーン共同体の『変節』について—」『立命館文学』、534号、pp.149-168.
- 59) Zips, Werner (1996), "Laws in Competition: Traditional Maroon Authorities within Legal Pluralism in Jamaica", *Journal of legal Pluralism and Unofficial Law*, 37-38, pp.279-305.
- 60) Besson, Jean (1997), "Caribbean Common Tenures and Capitalism: The Accompong Maroons of Jamaica", *Plantation Society in the Americas*, 4, pp.201-232.
- 61) Bieber, Judy, ed.(1997), *Plantation Societies in the Era of European Expansion*, Brookfield: Ashgate Publishing.
- 62) Blackburn, Robin (1997), *The Making of New World Slavery: From the Bondage to the Modern, 1492-1800*, New York: Verso.
- 63) Zips, Werner (1998) "We Are Landowners: Territorial Autonomy and Land Tenure in the Jamaican Maroon Community of Accompong", *Journal of Legal Pluralism and Unofficial Law*, 40, pp.89-121.
- 64) Klein, Herbert (1999), *The Atlantic Slave Trade*, New York: Cambridge University Press.
- 65) Eltis, David (2000), *The Rise of American Slavery in the Americas*, New York: Cambridge University Press.
- 66) Gottlieb, Karla (2000), *The Mother of Us All: A History of Queen Nanny*, Eritrea: Africa World Press.
- 67) Handler, Jerome and Kenneth Bilby (2001), "On the Early Use and Origin of the Term 'Obeah' in Barbados and the Anglophone Caribbean", *Slavery and Abolition*, 22-2, pp.87-100.
- 68) Bilby, Kenneth (2002), "Maroon Autonomy in Jamaica", *Cultural Survival Quarterly*, 25-4, pp.26-31.
- 69) Eltis, David, Frank Lewis and Kenneth Sokoloff (2004), *Slavery in the Development of the Americas*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 70) Bilby, Kenneth (2005), *True-Born Maroons*, Gainesville: University Press of Florida.
- 71) Thompson, Alvin (2005), "Gender and Marronage in the Caribbean", *Journal of Caribbean History*, 39-2, pp.262-289.
- 72) *Jamaica Gleaner* (ジャマイカの新聞)